

## 《 高 知 県 》

第 52 回中国・四国音楽教育研究大会 高知大会

研究主題 「**かかわる つながる ひびきあう**」

～主体的・対話的で深い学びの実現に向けて～

高知県音研小学校部会は、前回の中四国高知大会の後、各支部の取り組みと県大会を行いながら授業研究を進めてきた。また、3年前の新学習指導要領の告示に合わせて、研究主題を見直し、新しい授業づくりを考えてきた。

第 52 回中国・四国音楽教育研究大会高知大会は、長引くコロナ禍で音楽の授業に制限もある中、開催できるかどうか6月まで決められず、厳しい状況での研究となった。

「研究の灯を消さないように」と、できることを模索しながら取り組みを進めてきた。

最終的には紙上発表となり、小学校は4本の研究授業を行い、研究協議、助言者のコメント、成果と課題をまとめて、他県の先生方に冊子で見えていただくこととなった。

### 1. 研究主題設定の理由

昨年度全面実施となった小学校学習指導要領において音楽科の目標は、「生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力を育成することを目指す」となった。資質・能力を育成するためには、音楽的な見方・考え方を働かせること、また、育成を目指す資質・能力についても、具体的に「知識及び技能」の習得、「思考力・判断力・表現力等」の育成、「学びに向かう力、人間性等」の涵養と示されている。

目標達成に向けて、子供たちが生活や社会の中の音や音楽、他者と関わり、学んでいることや学んだことがつながることが大切であると考え、研究主題を「かかわる つながる ひびきあう」と設定し、授業の具現化をめざして研究を進めた。

### 2. 研究内容

下記の5点を研究の柱とした。

#### ◆「主体的・対話的で、深い学び」の視点からの授業改善

子供たちが学習の見通しを立てたり学習したことをふり返ったりして自身の学びや変容を自覚できる場面を設定したり、対話によって自分の考えなどをどのように広げさせたり深めさせたりするのか、学びの深まりをつくりだすための学習過程や学習活動の工夫を明らかにし、授業改善を行っていく。

#### ◆資質・能力の育成をめざす学習指導の工夫 学習指導要領の内容に照らし合わせて、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の資質・能力を明確におさえ、働きかけや手だてを考える。 ◆音楽的な見方・考え方を働かせ、思考・判断・表現する学習の充実

思考・判断のよりどころとなる要素を明確にして、音楽的な見方・考え方を表出できる場の設定や聴き取ったことと感じ取ったこととの関わりについて考える学習活動の工夫、効果的な指導の手だてを模索し、学習の充実を図る。

#### ◆指導と評価の一体化

題材の評価規準を明確にし、題材の構想を考え、1時間ごとの評価規準を設定し、おおむね満足できる状況にするための指導ができているかどうかをもとに授業評価をすることで授業改善につなげる。

#### ◆地域の特色や音楽文化を生かした活動の推進

地域に根付いた音楽や教材、地域の文化財をもとにした題材の発掘、他教科と関連させながら先人の実践から学んだり伝統音楽や異

文化にふれたりする学習の開発に取り組む。

4月、小学校部会の授業者と研究授業学年が決定した。授業内容についてまず考えなければならないのが「学校における新しい生活様式」であった。次に、「学校で協働しなければ学ぶことができない音楽の授業」を全員で確認した。

**授業1** 第4学年「インドネシアの伝統音楽に親しもう～ガムランの演奏をしよう～」

**授業2** 第6学年「雅楽の音楽をつくろう」

**授業3** 第5学年「オリジナルリズムアンサンブルをつくろう」

**授業4** 第5学年「ボディパーカッションでリズムアンサンブルをつくろう」

全ての授業に共通して、資質・能力を育成する指導と評価の一体化に重点を置いた。従来の内容ベースとは異なり、授業者の指導観に大きな転換を図る必要があったからである。

まず、題材の目標を設定し、題材の指導計画を立てた。どのような学習活動を展開するかは、従来とあまり変わらなかった。しかし、それぞれの学習で何ができるようになるか、どのように学ぶのかという視点がこれまでと違っていた。そこで、『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料（国立教育政策研究所）を参考にして、1時間ごとの評価規準を設定していった。そして、全員を評価規準に示される子供の姿にするための指導や手だてが適切であるかを見直した。

次に、指導や手だてが有効であったかを検証するため、1時間ごとの学習のふり返りを記述させ、学習の到達度を見取るとともに、指導の補充や修正をしたり、新しく生まれた問いを生かしたりして次の授業につないでいった。

### 3. 研究の成果

4本の授業づくりにあたって、指導案検討から研究協議までを、研究部と授業者の全員で行った。研究授業はそれぞれ別の日に設定

し、授業ごとに成果と課題を明らかにしながら進めていった。

#### **授業1**

高知市と姉妹都市であるインドネシアのスラバヤ市から贈られたガムランで、作曲家宮内康乃氏による作品「カメカメ Kura-kura」を演奏する学習である。この作品は、ガムランが高知市立春野東小学校で継承発展されていくことを目指すための新たな作品で、古典的な奏法に倣って子供に配慮的な工夫が施されている。

この授業において、器楽領域における資質・能力の育成のあり方が提案された。授業者は、まず教師自身がガムランの演奏に精通するよう努めた。そして、「主体的・対話的で深い学び」になるために、ガムランの複数のパートの役割を意識させることに重点を置き、「どのパートの音を聴いたら演奏しやすくなるかな」「どうすれば他のパートと音が合うかな」と投げかけた。さらに、グループの話し合いを取り入れ、それぞれのパートの役割を全体で共有する場を設けた。それにより、子供が主体となって、音のコミュニケーションを図りながら学ぶ学習を実現した。

#### **授業2**

身近にある代用楽器を雅楽の楽器に見立てて、グループで雅楽の旋律をつくる学習である。鑑賞と音楽づくりの2つの領域にわたり、音色と音の重なりを思考のよりどころとして雅楽の演奏の特徴に迫らせた。

この授業において、題材を貫く音楽的な見方・考え方を働かせて学習を深めていく展開を提案した。授業者は、「越天楽」以外の楽曲を鑑賞して比較させることで、雅楽の演奏に共通する特徴に迫らせた。また、鑑賞の視点をもたせて、部分を鑑賞したり全体を鑑賞させたりした。それにより、子供が捉えた雅楽の特徴が共通のものとなり、グループと個々の思いや意図が合致する音楽づくりを成立させた。

### 授業3

身近な打楽器を使って、8拍のリズムパターンを組み合わせるリズムアンサンブルの音楽をつくる学習である。打楽器やリズムパターンの選択肢を広げることで、音色やリズムの組合せによってできる音楽の多様性をもたらせた。

この授業において、聴き取ったことと感じ取ったこととの関わりについて考える学習活動の工夫、効果的な手だてを提案した。授業者は、つくった音楽や音楽をつくる過程における思考の視覚化を図った。グループで図譜を用い、8拍のリズムパターンをマグネットで表した。図譜によって音楽のまとまりを意識させ、マグネットを操作させることで友達と思いや意図を交流できるようにした。また、図譜を見ながら互いの音楽を聴き合うことで、グループの工夫のよさを共有させやすくした。

### 授業4

音色が多様なボディパーカッションでは、どのような音を出そうとしているのかを体の動きによって可視化することで、個々の思考が共有できる特徴がある。この特徴を生かして、3パートのボディパーカッションをつなげたり重ねたりしてグループのアンサンブルをつくる学習である。

この授業において、子供の思考に寄り添いながら、思いや意図をもった表現をより豊かにしていく指導を提案した。授業者は、音のイメージを大切に、椅子に座っている状態から足を強く踏み鳴らして立ち上がったたり、足踏みをしながらその場で回転したりするなどの、身体の動きを伴う表現を大いに認めた。それにより、「馬が駆け足をしてジャンプをする様子を表したいから、椅子に座って足を鳴らした」など、子供が十分に創造性を膨らませ、互いの工夫のよさを認め合いながら表現する学習を実現させた。

## 4. 今後の課題

資質・能力を育成する音楽科の授業においては、「思考力、判断力、表現力等」、「知識」、「技能」に関する内容を相互に関わせながら、一体的に育てていくことが重要である。そのために小学校部会では、音楽をどのように学んでいくかをデザインする題材構成力と、指導と評価の一体化が課題となった。

題材構成力では、音楽と音楽を形づくっている要素との関わりに気付いたり、聴き取ったことと感じ取ったこととの関わりについて考えたりして、表現について思いや意図をもち、その思いや意図に合った表現ができるようになっていく構成で組み立て、それぞれの学習に思考の文脈を生み出すことが大切である。それは、題材の目標を軸として、全員をおおむね満足できる状況にするための指導を毎時間丁寧につないでいくことである。

これらを実現するためには、評価規準の設定がとても重要な役割を果たす。評価規準を明確にして題材を構成することにより、1時間ごとの学びとそれを支えるための指導の手だてが焦点化される。そして、授業の終盤に振り返りシートを活用するなどして、子供に学びを自覚させたり学習の見通しをもたせたりすることは、授業評価にもつながり、教師自身の授業改善に直結した。

今後は、これらの成果と課題を踏まえて、県大会や支部の活動を通してさらに高知県音楽教育の発展に貢献していきたい。

最後に、本研究にご指導くださった文部科学省教科調査官の河合紳和先生と、高知県教育センター指導主事の小笠原実代先生に厚くお礼申し上げます。